

## 命をかけたメッセージを伝えるために

STV 札幌テレビ放送  
報道局報道部

勝 畠 早 苗

このたびは北海道医報1200号の発行、誠にありがとうございます。記念の貴重な機会に僭越ではございますが、これまでの経験から少し書かせていただきたいと思います。

私はテレビ報道の現場に身を置いて20年近くが経とうとしていて、さまざまな“現場”へ取材に行かせていただきました。その中で、取材に至るまでのハードルをいくつも超えなければならないところを1つ挙げて、と言われたならば…申し訳ありません、医療界を挙げると思います。当然のことですが患者さんを取材しようとする場合、個人情報のかげです。また患者の取材が可能になったとしても、病院内を気軽に撮影することはできませんし、仮に撮影しなくても、大きなカメラを持って病院を歩くと、他の患者さんは気になるかもしれません。ハードルが高くなるのも無理はありません。

そんな中、数年前のことですが、私はがん患者さんの取材を続けた時期がありました。1人のがん患者さんとの出会いをきっかけに始まったのですが、その方は働き盛り世代・子育て世代だったことから、治療費の工面を理由に生活が一変したことを知り、がんについて、特に治療費についてテーマを絞った取材活動をしていました。

印象深いのは、何人かの働き盛り世代のがん患者さんたちを取材させていただいた際、担当していた医師のみなさんがとても取材に協力的だったことです。

テレビのニュース取材の場合、治療中の患者さんの取材では、彼ら彼女らの命を見守り続ける医師の取材は欠かすことができません。特に、診察の様子、やりとりなどの撮影ができるとできないとは大きく変わってきます。その“現場”をありのままに克明に伝えることで、より強く視聴者に訴えかけることができるからです。

先に書きましたように、病院取材のハードルは高いからご理解いただけるかな…と不安を抱きつつ、担当医師に取材依頼をすると、ほぼご快諾していただきました。診察室へカメラを入れるにあたり、看護師さんらスタッフへの理解なども医師にお願いすることになりますが、そのような面倒事についても、ご多忙にも関わらず迅速に周知くださり、翌日から

いには「全て了解いただきました。大丈夫です」とメールをいただき「早い!」と驚いたものです。加えて、撮影取材以外にも私へのアドバイス、医療的知識などの情報提供などにも積極的に応じてくださいました。お会いするアポイントをとると、たいてい指定されるのは夜の7時や8時。1日の診察やカンファレンスなどを終えたあとなのでしょう。病院を訪ねると、正面玄関も施錠されていて、受付も真っ暗…慣れない私は少々ドキドキしながらも、たどりついた診察室も真っ暗。その先生がいらっしゃる診察室のみ灯りがついていました。「遅くにすみませんね」と笑顔の先生。こちらこそ、お疲れなのに申し訳ない…と思いながら、ふと思いました。なぜ、そこまで熱心してくださるのだろうか? そして、ハッとさせられました。まぎれもなく患者さんの思いを汲んでいるからなのだと。余命わずかと宣告されている命を削りながらテレビの取材に応じている患者さん。自分のがんに罹ったことを通じて感じた社会の課題を解決したい、同じがん患者さんに少しでも助けになりたい、“命をかけたメッセージ”を感じ、共鳴したからなのでしょう。だから、同じく患者さんのメッセンジャーになろうとしている目の前の記者にも力を貸すことが自身の役割だと向き合ってきたのでした。

おかげさまで、患者さんと医師の診察の場面や医師のインタビュー取材ができた場合の番組の反響はその分大きくなりました。がんという国民病がテーマというのもあって、放送後は多くの視聴者からご意見をいただき、また次の取材の視点がみつかり、取材を続けていくことができました。

がんについて申し上げますと、近年は、北海道ではがん罹患率、死亡者数を減らすべく、がん患者さんをはじめとして、北海道医師会のみなさまら医療関係者、行政、地方議員、民間企業、そしてわれわれメディアが一体となったがん対策への機運が高まりつつあります。違う業界がいくつも連携していくことは容易ではないかもしれません。しかし、当時の私の経験を振り返ると、すでに現場レベルで、業界を超えて一体となった取り組みは始まっていたのだと思います。自身の立場でできることは何なのか。そして協力し合ってできることはどんなことなのか。この機会に改めて共に考え、形にできる一歩になればと感じております。

### プロフィール

1999年札幌テレビ放送入社。報道部に配属後、2009年に営業局に異動のち、2011年より再び報道部在籍。